

上品な華やかさ、160年の時を経て

皇女和宮の打掛公開

染と織 やまだ(諏訪)あすから



諏訪市諏訪1の呉服店「染と織 やまだ」(山田敦子店主)は20日から30日まで、江戸時代末期の1862年、第14代将軍徳川家茂に嫁がれた皇女和宮親子内親王が着用された御搔取(打掛)を同店で展示、公開する。約160年の

時を経た御搔取は、朱色の地に金糸や絹糸で菊や桜などの刺しゅうが施され、上品な華やかさを放つ。同店は「大政奉還、江戸城無血開城などに力を尽くされた歴史上人物の和宮様が、実際に手に取られた打掛。目の当たりにして鳥肌が立つ」と話している。

皇女和宮(1846〜77年)は、仁孝天皇の第八皇女で孝明天皇(明治天皇の父)の妹に当たる。61年京都から江戸に嫁がれる際は中山道を通じて江戸に向かい、下諏訪宿では本陣の「上段の間」に宿泊されている。皇女が武家に嫁いだ唯一の例で、その一行は警護も含め膨大な人たちが動員され、翌年に祝言が行われた。

皇女和宮が着用された御搔取(打掛)。20日から30日まで諏訪市の呉服店「染と織 やまだ」で展示される

た。66年に家茂が亡くなった後は静寛院宮と名乗り、徳川家存続のため家茂の母・天璋院篤姫とともに尽力した。

御搔取は当時の貴婦人の礼服で、帯を締めた上から掛けて着る長小袖。和宮の御搔取は兄宮の孝明天皇から贈られたといわれる。現在は京都市のコレクターが所蔵。同店の取引先(京都市)がコレクターとやまだとの縁を結び、展示が実現した。山田店主は「丈は160センチ、ゆきは60センチと現代物と比べると小さく小柄な宮様を想像する」「染色は全て植物からと思われ、総じて美しい。和宮様の生涯を語る一枚に思われ感慨深い」と話す。

展示準備中に偶然立ち寄った諏訪市の今井和子さんは「刺しゅうのきめ細かく丁寧な仕事ぶりが見事、かなり時間を掛けて仕上げた様子が伝わってくる。見ているほどに歴史がしのばれる」と見入っていた。

同店は「諏訪で間近に見られる貴重な機会になると思う。気軽に来店を」と鑑賞を歓迎している。営業時間は午前10〜午後6時。水曜日休み。問い合わせ同店(電話0266・58・0694)へ。

(宮坂早苗)